

恋ヶ窪駅前のハートのベンチにすわり、わたしは一年前の約束を思い出していた。あの頃の地球には、まだ花が咲き、小鳥が空を飛びまわっていた。空の青さがいとしいものだとなくしてみても気づく。

何でこんな事になってしまったのだろう。人類が火星に移住を開始してから三百年が経つ。こんなことになっているのに「人類はかんきょうが悪い!!月に住もう」と考えているらしい。まったくこまったものだ。

何度不動産屋に行っても火星のよい物件が見つからない。五件目の不動産屋で運命の物件に出会った。見つけたのは物件だけではない、部屋の窓からいつも見ている彼と出会ったのも運命だったように思う。

「あつ。あの・・・。」

ヨレたシャツを着たその彼は、私に語りかけて来た。

「すみません。コインランドリーを探してるんだけど、このあたりにありますか？」

と彼は言った。私は、びっくりした。なぜなら、火星にコインランドリーはなかったからだ。

「火星にコインランドリーはないですよ？」

「コインランドリーはないけど、近くに川ならありますよ、きょうは天気が良いのですぐに乾くでしょう」

とやさしそうな見ず知らずの女性が声をかけてくれた。

久しぶりに人のやさしさに触れたような気がしてとてもあたたかな気持ちになった自分がいた。人はこういうところがいいなあと、私はしみじみと感じた。

ん？この女性、どこかで・・・

そう考えていると、彼もこう言った。

「ん？あなた、何処かでお会いしたことがあるような・・・」

その瞬間、体が放り出されるような感覚がした。

私はひざから地面にすべり落ちた。よだれをぬぐいながら、なんてヘンテコな夢を見てしまったのだろう、しかも駅前のベンチで眠りこけてしまうなんて、と悔やんだ。

これもすべて、一年前に出会ったあの人が「わたしは火星から来た」だなんて妙なことを言い出したせいだ。それからだった私が悪い夢を見はじめたのは。

大きな川での洪水、途方もない高さの火山の大噴火、出会ったことのない生物の大群・・・いつも恐怖心を抱きながら目覚めるのだ

が、その夢の欠片を思い出しながら、その虚像と結びつく何かを、書籍やインターネットを検索すると、いつも現れる映像は火星だった。

一年前のあの人との約束を思い出そうとしてもなかなか思い出せない。しかし、火星がその約束に関係しているのは間違いないように思う。

「よし、火星に行くか」私は一念ほつきして、コツコツとためていたよきんをこの機会に全て使うことにした。

さて、どうやって火星に行くか？そう思案していたところ、ヒラと「火星移住したい方。」のチラシが足元に落ちてくる。私は、さっそくこのチラシを拾って家に持ち帰った。

「もしもしこちらニコニコ火星不動産です。」電話をかけるとそこは夢の中で五件目に訪れた不動産屋と同じ名前だった。

私は驚きつつも

「あの・・・火星への移住を考えているのですが・・・。」と切り出した。

「ありがとうございます！火星への移住は初めてですか？当店は、初めての方にキャンペーンを行ってしまして・・・。」と不動産

は答えた。

「キャンペーンって・・・？」

すると不動産屋は

「火星の好きな場所へ2LDKの家が建てられます。」と答えた。

「3LDKにはなりませんか？」とカラスと呼ばれる女性は言った。

「そうですね。3LDKでしたら木星がおすすりめです」

すると、電話のベルがなる。

「はい、こちらぶんぶん不動産、はい、はい、えっ？あ、はい、はい、そうですかあ、はい、はい、あーはい、はい、はい、はい、はい、どうもー」

「すいませんねー。いまちようど木星の物件でちやいましたねー。残念だねー。どうしますか？」

「じゃ、土星はどうです？」

「ダメダメ、土星なんてダメー。」

「はあわかりました。」

「じゃ、火星は？」

「ウン、ボツともえちやうかもよ。」

「……」

こんな不動産屋なんて、ブラックホールに飲み込まれてしまえばいいのに、と思った。

はっ!!と気づくとそこは、夜11時の国分寺駅のホームにいた。あれ？さつき恋ヶ窪にいたはずだが……

コインランドリーに行けてないことを思い出し、歩き始める。途中の夜道で小さな公園の前を通った。ブランコに誰かが座ってゆれている。あの人は、もしかして………。

「ん？あなた何処かでお会いしたことがあるような……」と彼に話しかけてみた。

「そうですね。一年前のあの約束覚えていますか？火星が良く見えた夜のことでした……」

「もちろん覚えています。ぶんぶんうおーくの後片付けと一緒にやりましたね。たしか、隣のブースで出店していらして。『一度出会うだけなら偶然、二度目なら必然だ』って言ってくれましたね。忘れるはずがありません」

「やあ」

やっと彼があらわれて、わたしは顔をあげた。もう、来ないと思

ってたからすごく意外だ。

「来てくれたんだ」

「忘れるわけないよ。大勢で少しずつかいた小説っていうのが、見てみたいからね」

売れっ子の彼は、前よりも高いスーツを着ていた。

「がんばったわ。すごく楽しいものができた」

「へえ、どんなもの？」

「ぬくもりがあって、未来があって、読み終わったあと、空がみたくなる。そして、一年後が楽しみになるものよ」

「早く見せてよ。」

「うーん。どうしようかな」

わたしは、急にもったいなくなった。この小説、プロットとか、盛り上がりとか、キャラ設定とか、整合性とか口にする、ミステリ―作家の彼には、読ませたくない。

「あと、一年後、また、ここに来てくれたら、読ませてあげる」

「このハートのベンチに。また？」

「うん」

わたしはすくっと立ち上がる。

「まっつて、なんだよ。それ。時間つくって来たんだぞ。」

かれは、中学の文芸部の時、みせていたのと同じようなふくれつつらをした。売れっ子になっても、怒るときは思春期と同じなんだと、わたしはおかしくなる。

でも、今の彼に、この小説のよさは、たぶんわからないだろう。わたしはひとり、ふふふっと笑いを噛みしめ、小説を胸に歩き出した。

「せっかく来たんだから、国分寺の公園でもあるきましようっよ」